

## 令和2年度 学校保健統計健康状態調査

### 調査結果の概要

- ・ 中学1年生（12歳）のDMF T指数（一人当たりの永久歯のむし歯等数）は、0.39本で、昨年度から0.05本減少した。また、高等学校1年生のDMF T指数は0.91本であり、昨年度から0.2本減少した。
- ・ 歯肉の状態においては、昨年度より中学校、高等学校で疾病割合が減少したが、小学校では微増した。
- ・ 食物アレルギーを有する者の割合は、昨年度より小学校、高等学校で微増した。

### 1 調査の目的

児童及び生徒（以下「児童等」という）の発育及び健康状態を明らかにすることを目的とする。

学校保健安全法施行規則により実施される健康診断の結果に基づき、健康状態調査を実施する。

### 2 調査の対象

本調査の対象者は、文部科学省の学校保健統計に準ずるものとする。

（発育状態調査）

令和2年度学校保健統計調査（文部科学省）岐阜県調査実施校の抽出調査結果

（健康状態調査）

岐阜県公立小学校、中学校、義務教育学校、高等学校に在籍する満6歳から17歳までの児童等在学者全員を対象

校種	学校総数 (校)	在学者数 (人)	参加校数 (校)	対象者数 (人)
小学校	365	103,746	361	99,496
中学校	176	53,061	174	51,644
高等学校	66	41,967	66	41,149
総数	607	198,774	601	192,289

※義務教育学校は、前期課程は小学校、後期課程は中学校のデータに含む。(以下同じ)  
 ※幼稚園のデータは、学校保健会に加入し調査協力を得られる園が年々減少しており、当該年齢児の10%未満のデータしか集計できないため、令和2年度から調査対象としない。

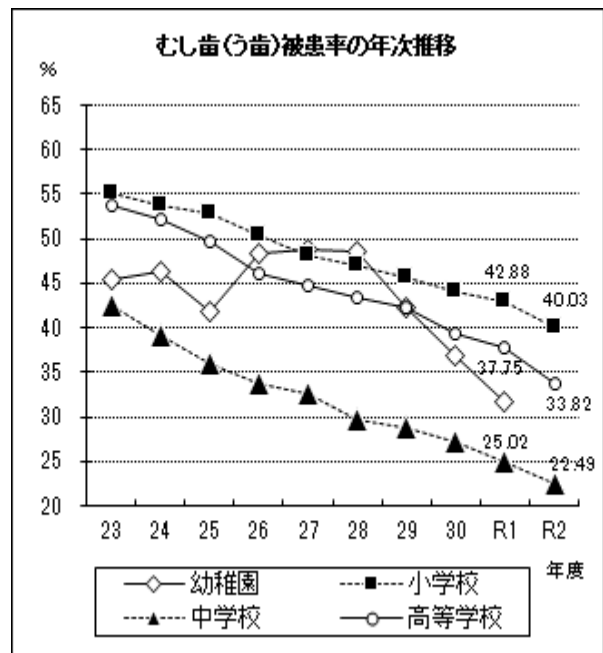
### 3 調査項目

本調査の項目は、文部科学省の学校保健統計調査項目に準ずるものとする。本県独自の項目として「食物アレルギー」「1型糖尿病」「2型糖尿病」「腎性糖尿」「学校生活管理指導表（アレルギー疾患用）の活用者数」を追加している。今年度は、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、健康診断の開始及び終了時期が遅くなったため、心臓疾患・心電図異常・腎臓疾患・糖尿病については調査を行わないこととした。また、今年度は全国平均の公表が遅いため、全国平均値との比較は行わない。

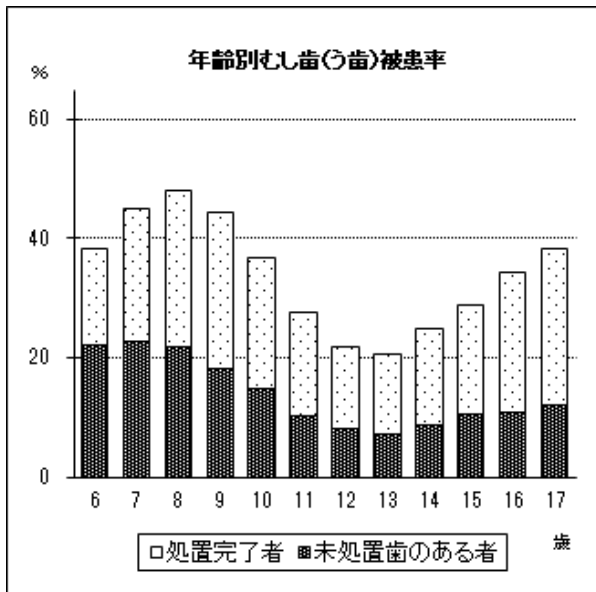
### (1) むし歯（う歯）

#### ○むし歯はさらに減少傾向

むし歯被患率は、小学校で40.03%、中学校で22.49%、高等学校33.82%となり全校種で昨年度より減少した。

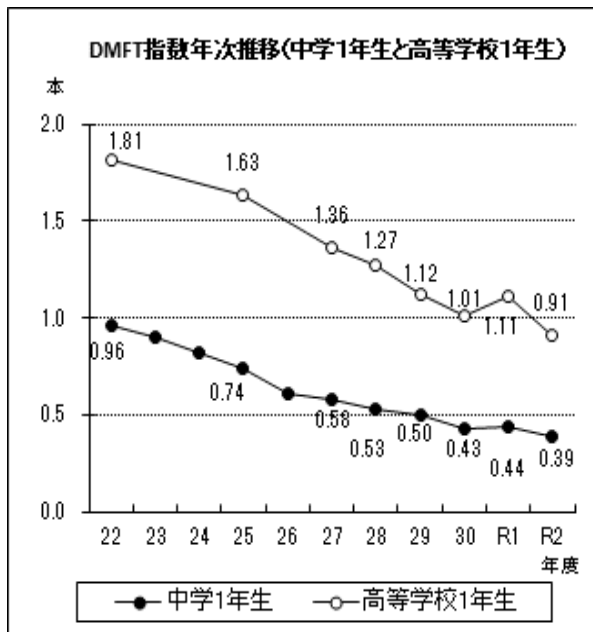


むし歯被患者の内、未処置歯のある者は、6～8歳に多く、その後は減少したが、14歳から僅かに増加した。むし歯被患率が10～12歳において割合が減少したのは、乳歯が生え替わることによると考えられるため、14歳以降の永久歯のむし歯を増加させないよう、幼少期からの教育及び家庭との連携が重要である。



DMF T 指数 (一人当たりの永久歯のむし歯等数)  
 D : 永久歯のむし歯で未処置の歯  
 M : 永久歯のむし歯が原因で失った歯  
 F : 永久歯のむし歯で処置を完了した歯

DMF T 指数を昨年度と比較すると、中学1年生(12歳)は0.05本減少し0.39本、高等学校1年生(15歳)は、昨年度から0.2本減少し0.91本であった。

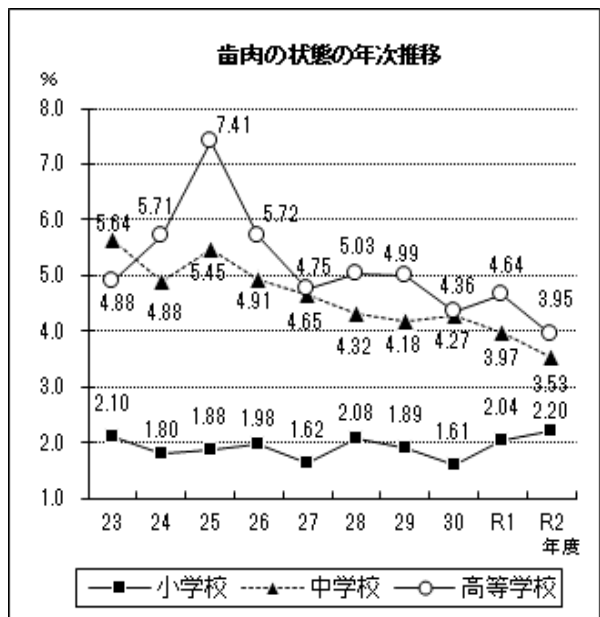


## (2) 歯肉の状態

歯肉の状態: 歯肉に炎症があり、歯肉の状態が「2」(専門医による診断が必要)と判定された者

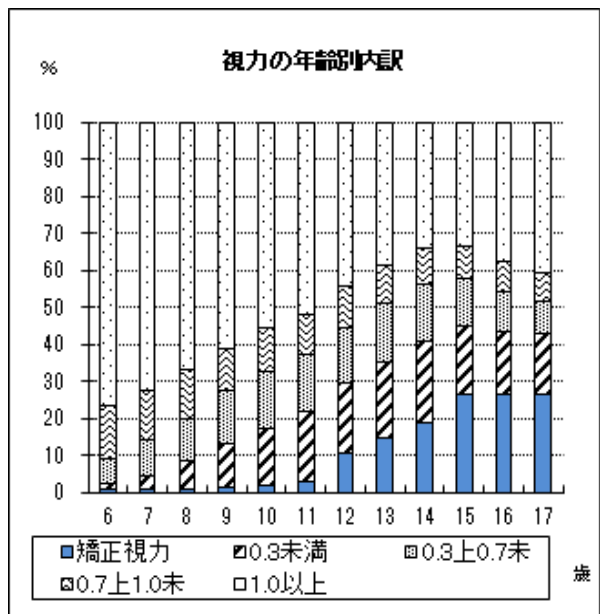
歯肉の状を昨年度と比較すると、中学校と高等学校において減少した。小学校においては昨年度から増加した。

歯科検診では、学校歯科医と連携し、比較的軽度の歯肉炎であっても予防のため「2」(要受診)と判定している学校も多いことが被患率を上げている要因の一つではある。

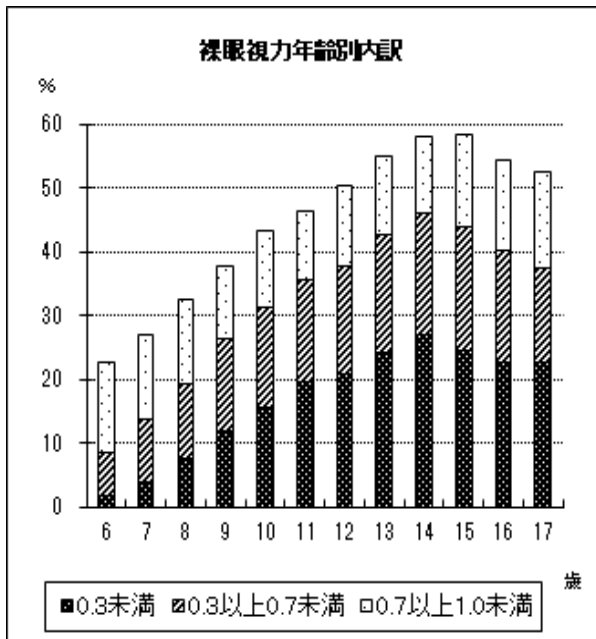


## (3) 裸眼視力

裸眼視力 1.0 未満の者の割合は、年齢が進むにつれて増加していき、15歳において最も多かった。

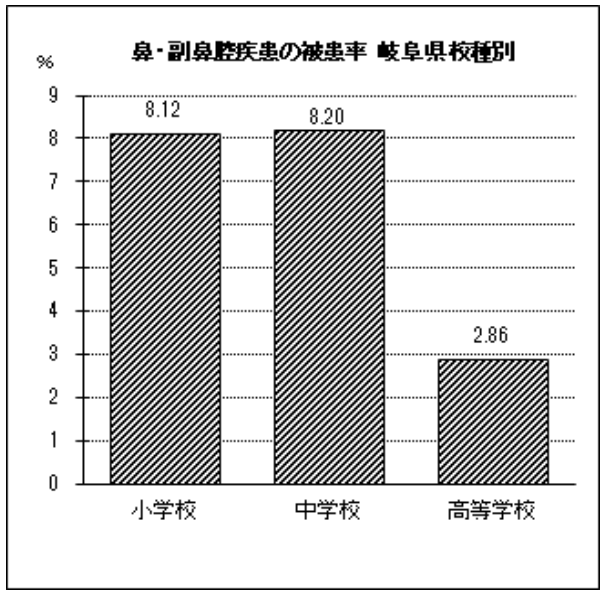


なお、裸眼視力年齢別では1.0未満の者が15歳で最も多かった。



鼻・副鼻腔疾患・・・慢性副鼻腔炎、慢性鼻炎、鼻ポリープ、鼻中隔彎曲、アレルギー性鼻炎の疾患・異常と判定された者

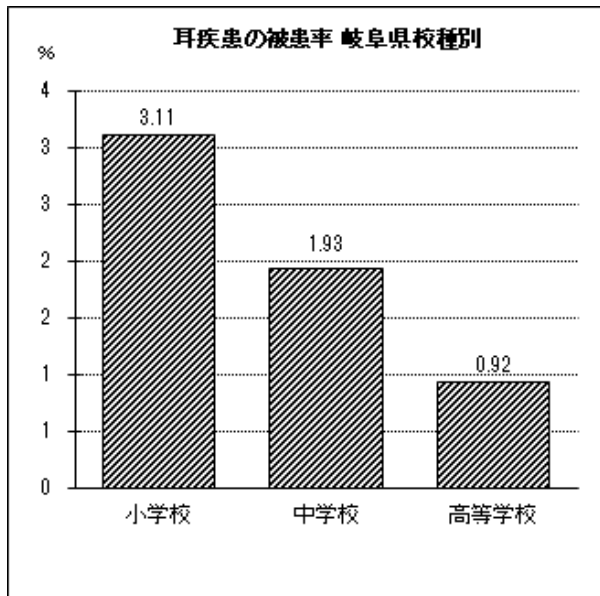
校種別では高等学校の疾患率が下回り好結果だった。



**(4) 耳疾患・鼻・副鼻腔疾患**

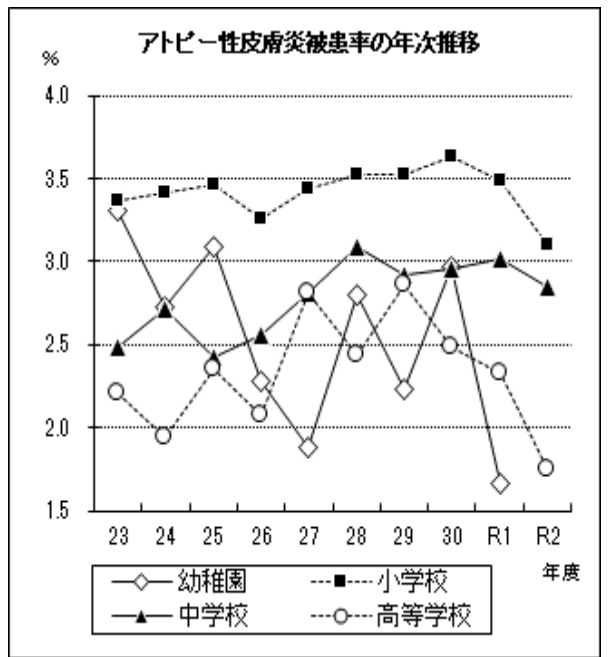
耳疾患・・・急性・慢性中耳炎、内耳炎、外耳炎、メニエール病、耳垢栓塞等の疾患・異常と判定された者

校種別では、小学校の疾患率が高かった。



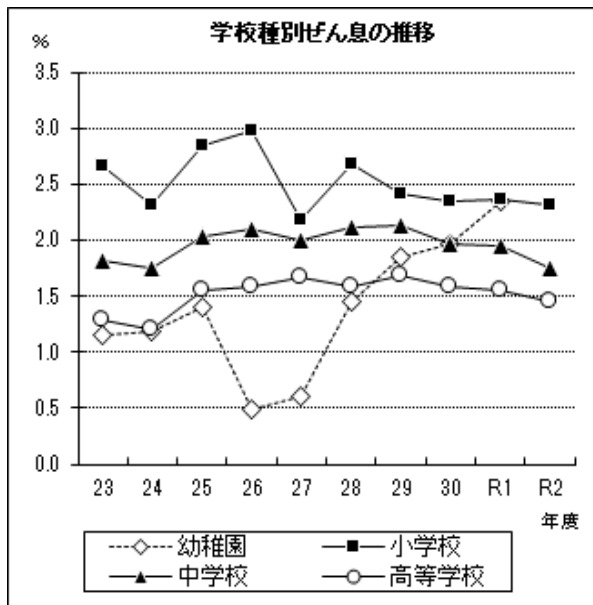
**(5) アトピー性皮膚炎**

校種別では、小学校の被患率が高い傾向である。すべての校種において、昨年度より下回り、好結果だった。



### (6) ぜん息

全ての校種において、昨年度を下回り、好結果だった。

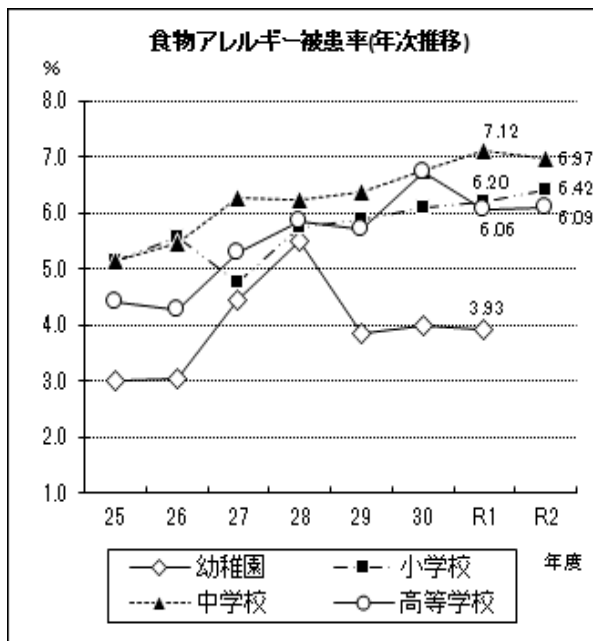


### (7) 食物アレルギー

○食物アレルギー被患率は小学校、高等学校において増加傾向

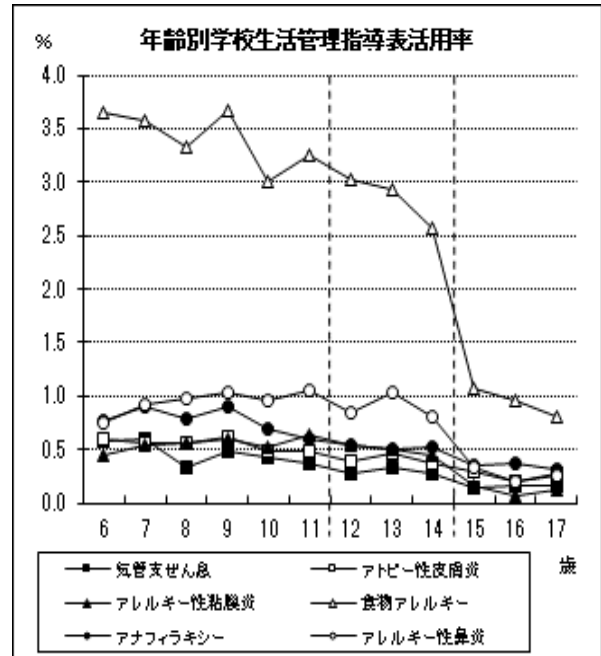
食物アレルギーの者：入学時、または健康診断前の保健調査等で食物アレルギーと確認された者

食物アレルギーを有する児童等の被患率を昨年度と比較すると小学校と高等学校において増加した。



### ○学校生活管理指導表活用は「食物アレルギー」が多い

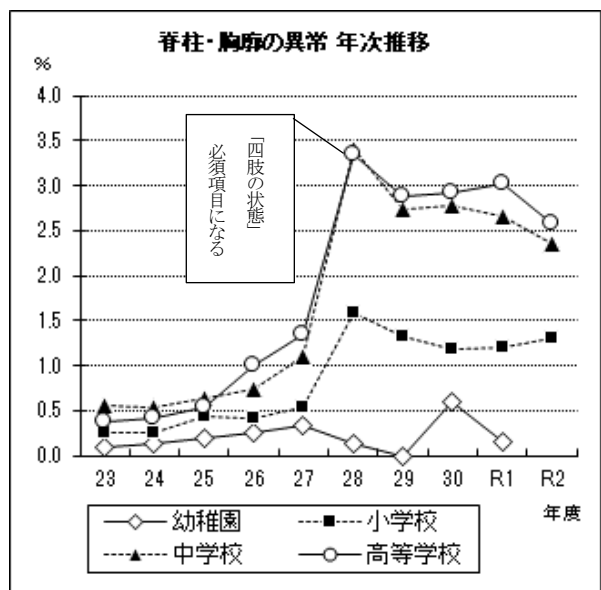
学校生活管理指導表活用率は「食物アレルギー」が、他のアレルギー疾患に比べて高い。また、年齢が上がるにつれ、活用率が下がっている。



### (8) 脊柱・胸郭・四肢の状態の異常

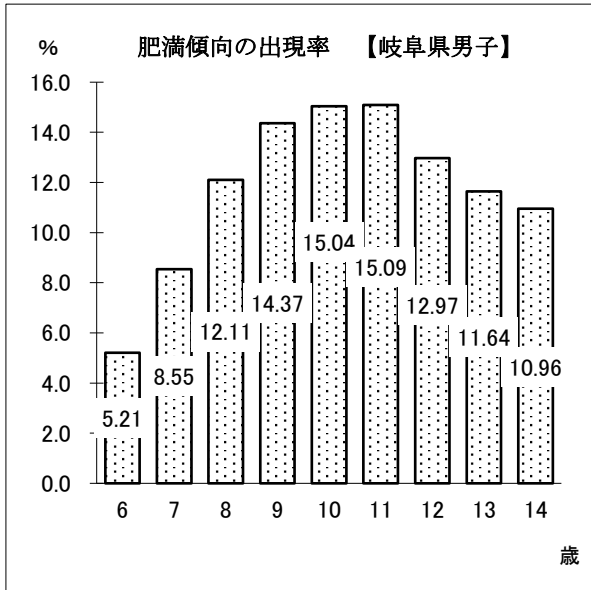
脊柱・胸郭・・・脊柱、胸郭及び四肢の状態が異常と判定された者

平成28年度より健康診断の項目「四肢の状態」が必須項目に加わり運動器検診が実施されている。校種別では中学校、高等学校の疾患率が高いが、昨年度よりは下回った。小学校の疾患率は昨年度よりやや上回った。

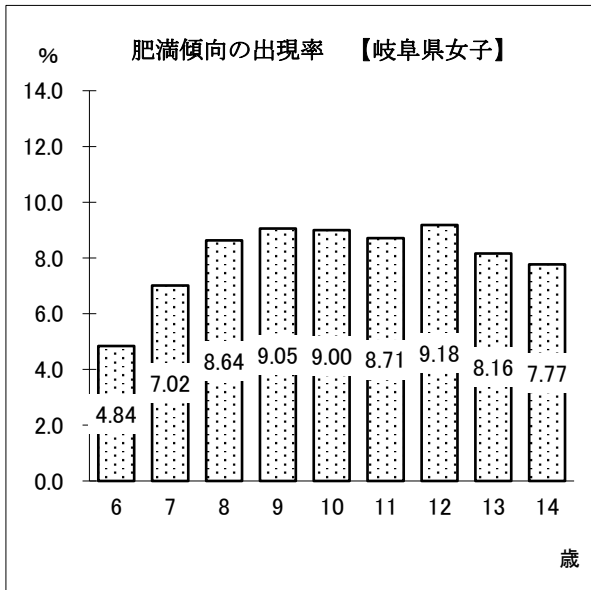


### (9) 肥満傾向

9歳から11歳において、肥満傾向の割合が増加した。

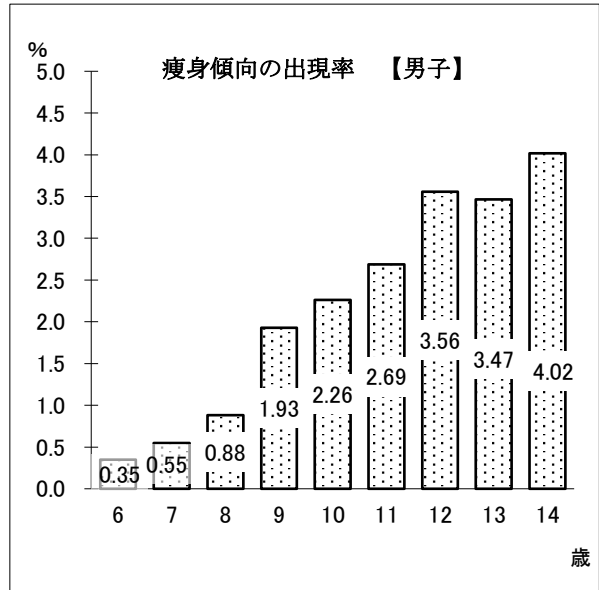


男子と比較し、女子の肥満傾向はすべての年齢において少なかった。

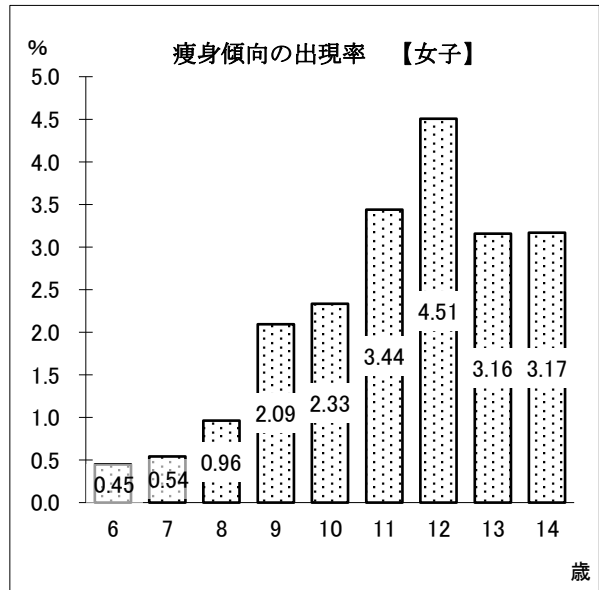


### (10) 痩身傾向

男子は、12～14歳において、痩身傾向の割合が増加した。



女子は、12歳の痩身割合が増加した。



### (11) 高等学校のBMI

BMI・・・成人の肥満並びに痩せの評価方法のひとつ  
 $\text{BMI} = \frac{\text{体重(kg)}}{(\text{身長(m)})^2}$

高校生に対して、BMIを指標として肥満及び痩身傾向を算出している。男女ともに、BMI 18.5未満の割合が15歳に高い傾向がある。

